



江幡 真史

セディナ
特別顧問



典型的な
イギリス人

金融街の中心地ロンドン・シティにあるイングランド銀行に隣接するThrogmorton str.に現地責任者として会社を立ち上げたのは1990年3月、34歳の時である。EU発足前夜の欧州は各国通貨が乱立し多国の出身者であふれ、文字通り生き馬の目を抜く世界であった。ここで電話回線一本敷くところから始め四年間にわたり経営を担ったのは貴重な財産である。その中から今日的な視点での学びを二つほど紹介したい。

まず、第一にインクルージョンである。人の採用には準備に相当時間をかけ、気を遣いながら進めたものの、一つの事件が起きた。求める人材は「イギリスに初めて子会社を設立し採用するので典型的なイギリス人女性が好ましい」と斡旋会社に伝えたところ、担当からは「差別的なこととなるので、そのような形では斡旋できない」と。私は「日本の従業員も、なるほどイギリスに会社が設立されたのだと写真を見て納得が持てるようにしたい」と再度強調するも「法律に触れる」

とまで言われ平行線に終わる。このエピソードから25年が経過し、わが国ではダイバーシティが喧伝されるが、当時のイギリス人たちが人種や階級といったことに最大の配慮をし、また努力もしていた感覚を私は遅まきながら今日やっと実感として持てるようになった。

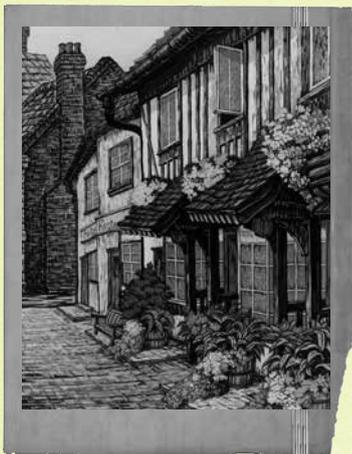
第二はワーク・ライフ・バランスである。当時6歳の長女と3歳になる長男を現地校に入学させたが、外国人を忍耐強く受け入れる学校側の姿勢に長い航海の歴史を感じた。一方で送迎は子どもたち

を見守る親の役割であり、安全は自己責任である。おのずと母親同士の交流も盛んとなり、時には不慣れな中で自己主張をしなければならない。日本では家庭を顧みないほどに一日の時間を仕事に振り向けていた私だが、そのようなことではこちらの城は守れない。その日に起きたことを会話し、時には解決策を論じ行動を起こす。真剣に家族と向き合い、夫であり父親としての責任を果たす。まさに家族との絆を形成したわけだが、その要諦は公私の時間の切り分けではなく、男子としての社会的責任である。

さて集合写真はホテルクラリッジスにおける会社設立レセプションを控えての記念写真である。本社の社長をはじめ重役に挟まれ栗色の髪的女性はひとときわ輝き存在感を放っている。もう一枚の街並みは、子どもたちが通学したミドルセックス、ピナーの地を亡き父が木版画作品として残したものである。いずれからも伝統に刻まれた一枚上手の英国の風格を感じるわけだが、われわれも2020年の東京オリンピック・パラリンピックを経て、地球人としての誇りが持てる国民に脱皮していたいと強く思う。



ホテルクラリッジスでの記念写真
前列左が筆者



第44回板院展 「ピナーの春」江幡 謙